

## 症例報告

## 壁内転移を認めた早期胃癌の1例

曾田悠葵, 辻本広紀, 島崎英幸\*, 中西邦昭\*, 平木修一, 堀口寛之, 野村信介,  
長谷和生, 山本順司, 上野秀樹

防医大誌 (2017) 42 (2) : 74-79

**要旨:** 胃癌の壁内転移は胃癌全体の0.6%に見られる稀な転移形成であり, 文献上そのほとんどが進行胃癌に認められる。今回我々は早期胃癌に壁内転移を伴う症例を経験した。症例は58歳の男性。心窩部痛を主訴に受診し, 上部消化管内視鏡検査で胃前庭部後壁大弯に25mm×20mm大の2型腫瘍を認め, 生検で低分化腺癌と診断された。腹部造影CT検査では胃前庭部に造影効果を伴う壁肥厚が認められた。L post type2 cT3(SS) cN0 cM0 cStageIIAの診断で, 腹腔鏡下幽門側胃切除術(D2郭清)を施行した。摘出標本には幽門前庭部後壁に径25mm×20mmの0-IIc+III型腫瘍を認め, pT1b2 ly1 v1 pN1 (#4dに1個) cM0 pStageIBと診断された。腫瘍内には非癌粘膜島と粘膜下層までの組織欠損を伴ったUL-II潰瘍が形成されていた。また, 腫瘍の遠位断端から25mmの粘膜下層に, 正常組織に覆われている長径1.5mm程度の主病変の組織像と類似する腺癌増殖巣が認められ, 壁内転移と考えられた。早期胃癌壁内転移の臨床学的意義は不明な点が多く, 嚴重な経過観察が必要である。

索引用語: 壁内転移 / 胃癌 / 腹腔鏡下胃切除

## 緒言

胃癌の壁内転移 (Intramural metastasis) は胃癌症例のおよそ0.6%に認められる稀な進展形式である。これまで胃癌に伴う壁内転移の報告では, その多くは進行胃癌に伴うものである。壁内転移は食道癌においては予後不良因子として広く知られているが, 胃癌, 特に早期胃癌においては報告が少なく, その臨床的意義は不明である。今回我々は壁内転移を有する早期胃癌の切除症例を経験したので, 文献的考察を加えて報告する

## 症例

患者: 58歳, 男性。  
主訴: 心窩部痛。  
家族歴: 兄が舌癌, 肺癌。  
既往歴: 痔核 (手術)。

現病歴: 2016年の2月頃より主訴が出現したため前医を受診した。上部消化管内視鏡検査で胃前庭部後壁に潰瘍性病変を認め, 生検にてGroup 4と診断され, 精査加療目的で当科に紹介受診となった。

入院時現症: 身長166cm, 体重67kg。身体所見に異常を認めなかった。

入院時採血検査所見: 血算・生化学・凝固はいずれも正常範囲内で, CEA 1.1ng/ml, CA19-9 6.0 U/mlと腫瘍マーカーの上昇も認めなかった。

上部消化管内視鏡検査: 前庭部大弯寄りに周堤を伴う2型腫瘍を認め, 生検で低分化腺癌と診断された (Fig. 1)。

上部消化管造影検査: 胃前庭部大弯に壁の不整像を認め, 潰瘍底に造影剤の貯留を認めた (Fig. 2)。

胸腹部造影CT検査: 胃前庭部に造影効果を

伴う壁肥厚像が認められた。明らかな遠隔転移と所属リンパ節転移は認められなかった

(Fig. 3)。

入院後経過：L post type2 cT3(SS) cN0 cM0

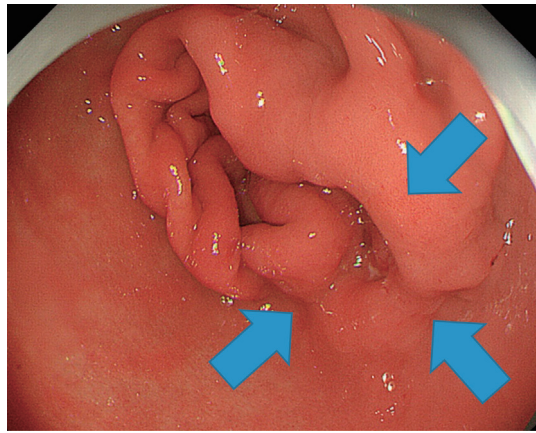


Fig. 1. 上部消化管内視鏡検査：前庭部大弯後壁寄りに棍棒状の襞の途絶を伴い、粘膜の浮腫性変化を伴う2型腫瘍を認めた（矢印）。他の部位に異常所見は得られなかった。

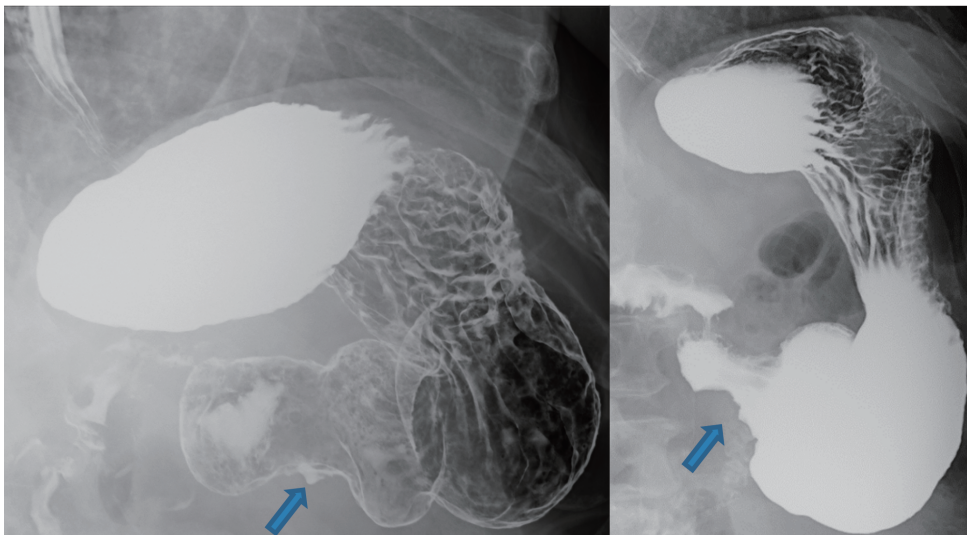


Fig. 2. 胃透視検査：幽門前庭部に壁不整像，腫瘍中心部にバリウムの貯留を認めた（矢印：腫瘍による壁不整像）。



Fig. 3. 腹部造影 CT 検査：胃前庭部に造影効果を伴い、粘膜下層の浮腫状変化を認めた。周囲臓器への浸潤は明らかでなく、腫大したリンパ節や遠隔転移を認めなかった。



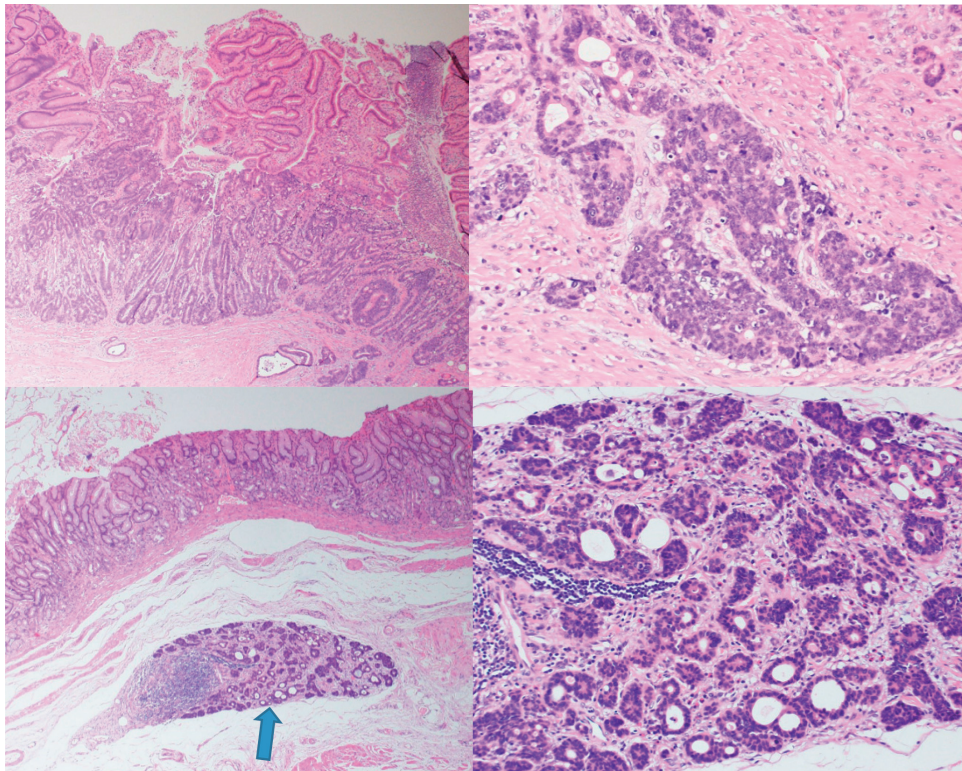
cStageIIA の診断で、腹腔鏡下幽門側胃切除術 (D2 郭清), Billroth- I 法再建術を施行した。組織学的に, L post type 0-IIc + III 25×20mm tub2 >tub1 pT1b2 ly1 v1 pN1(#4d:1/7) cM0 pStage I B と診断された (Fig. 4)。また, さらに主

病変の遠位側から25mm の粘膜下層に, 主病変の組織像が類似する長径1.5mm 程度の腺癌の増殖巣が認められ, 壁内転移と診断された (Fig. 5)。なお, 切除検体からはヘリコバクター・ピロリ菌は検出されず, 萎縮性胃炎や腸上



A | B

Fig. 4. 胃切除標本 : A) 胃前庭部大弯後壁よりに open ulcer (UL-II) を伴う 25×20mm の 0-IIc + III 型腫瘍を認めた。B) 検体を図のように104分割し, 病理学的検索を行ったところ, 主病変から25mm 離れた肛門側に壁内転移が認められた。



A | B  
C | D

Fig. 5. 病理組織学的検査所見 : A, B) 原発巣はクロマチンの増殖した類円形の核と円柱状から不整形胞体を有する腫瘍細胞が, 不規則に分枝・融合を示す中分化管状腺癌の像を示し, 粘膜筋板への浸潤が認められた (A : H.E. ×40, B : H.E. ×200)。C, D) 腫瘍遠位側から摘出標本の肛門側に25mm 離れた粘膜下層に, 1.5mm 程度の原発巣と類似する腺癌の増殖巣が認められ, 壁内転移と診断された (C : H.E. ×40, D : H.E. ×200)。

Table 1. 胃壁内転移を伴う胃癌報告例

Author	Location				Macroscopic type								Depth of invasion					Lymph node metastasis					Distant metastasis					Histological type					Lymphatic invasion					Venous invasion														
	U	M	L	NR	0	1	2	3	4	5	NR	m	sm	mp	ss	se	si	N0	N1	N2	N3	NR	M0	M1	NR	pap	tub	por	sig	lmuc	NET	ly0	ly1	ly2	ly3	NR	v0	v1	v2	v3	NR											
Hashimoto	10	10	9		2	5	15	4	3					1		5	15	7	1	2	8	19		1	14		4	12	9	2	2																					
Kato			1											1																																						
Shiozaki	4	5	2			3	4	3		1					3	4	4	2	3	2	4					11		1	5	3	2							5	6													
Tsuburaya	1					1										1										1																										
Asada		1									1					1							1									1																				
Murakami	1							1								1																																				
Shimoyama			1					1								1											1																									
Yoshikawa			1				1													1						1																										
Katube	1					1										1					1					1						1																				
Momose		1				1							1													1									1																	
Inoue		1				1							1													1										1																
Asai	1					1							1													1											1															
Yoshimoto				1		1							1													1									1																	
Our case			1			1							1													1									1																	
Total	18	18	15	1	5	3	10	21	7	4	2	0	5	3	10	22	12	4	9	13	24	2	21	19	12	8	21	15	5	2	1	1	1	9	16	25	1	11	11	20	9	1										

NR: not referred

皮化生も顕著ではなかった。術後経過は良好で術後13日目に軽快退院となった。

### 考 察

胃癌の壁内転移は稀な進展形式であり、Hashimoto ら<sup>1)</sup>によると胃癌において壁内転移を認めた症例は、4714例中29例 (0.6%)であったと報告されている。医学中央雑誌において「胃癌」and「壁内転移」をキーワードとして検索した結果 (1984年から2016年, 会議録を除く), 22例の症例報告を認めた (Table 1)。これらのうち原発巣が進行癌であったものが18例で、早期胃癌症例であったものは、国内・海外合わせてわずか4例であった (PubMedにおいてキーワード「gastric cancer」and「intramural metastasis」で検索)。

胃癌の壁内転移は、和田ら<sup>14)</sup>によって、「胃の原発巣が粘膜下層や漿膜下層のリンパ管網や静脈網を通じて原発巣と離れた粘膜下, 筋層下及び漿膜下に転移巣を形成するもので, 原発巣, 転移巣は組織学的に同一であり, 病巣間に連続性がないもの」と定義されている。また Hashimoto ら<sup>1)</sup>は, (i) clearly separated from the primary tumor; (ii) located in the wall of the esophagus, stomach, or duodenum; (iii) having a gross appearance of a submucosal tumor without intraepithelial cancer extension; (iv) having the same histological type as the primary tumor; and (v) lacking any evidence of intravascular growth の5項目を診断基準としている。本症例では、腫瘍の遠位側から摘出標本の肛門側に向かって25mm離れた部位に主病変と類似する腺癌の増殖巣が粘膜下層に

1.5mmの範囲で認められ、この病変は原発巣と連続性がなく、病変の直上粘膜に腫瘍細胞を認めなかったことから、胃癌の壁内転移と診断した。

胃癌壁内転移の機序であるが、本症例では原発巣においてリンパ管侵襲、静脈侵襲がともに陽性であったことから、リンパ行性、血行性のいずれも考えられる。しかし、リンパ管侵襲、静脈侵襲の程度が詳細に記載のあった51例で検討すると、静脈侵襲の陽性率は41例 (80.4%)であったのに対して、リンパ管侵襲は50例 (98.0%)認められ、さらにリンパ管侵襲が中等度以上 (ly2, ly3)認められた症例が41例 (80.4%)と高度なリンパ管侵襲が特徴であり、胃癌の壁内転移において、主にリンパ行性の転移形式である可能性が示唆された。また胃癌の壁内転移は、2つ以上の転移巣を伴うものが38%と報告されており、全割による詳細な病理学的検討を行わない場合には、見逃される可能性がある<sup>1)</sup>。

壁内転移を伴う進行胃癌の予後は極めて不良であるとされ、Hashimoto らの報告では、手術が施行された症例の平均生存期間が11ヶ月、3年生存率が13.9%であり、壁内転移を伴わない進行胃癌と比較しても有意に予後不良であったと報告されている<sup>1)</sup>。しかしこれまで早期胃癌に伴う壁内転移の報告は自験例を含めて5例であり、その予後に関しては不明である。本症例においては、残胃にIMが存在する可能性、早期胃癌に伴うIMの臨床的意義は不明であることを説明した上で、外来にて嚴重に経過観察する方針とした。

早期胃癌における壁内転移の臨床的意義につ



いては、更なる症例の蓄積が必要であり、今後の検討課題である。

## 結 語

壁内転移を伴う早期胃癌症例は極めて稀であり、その臨床的意義の解明には更なるデータの集積が必要と考えられた。

## 文 献

- 1) Hashimoto, T., Arai, K., Yamashita, Y., Iwasaki, Y. and Hishima, T.: Characteristics of intramural metastasis in gastric cancer. *Gastric Cancer* **16**: 537-542, 2013.
- 2) 加藤岳人, 秋田幸彦, 七野滋彦: 興味ある胃癌壁内転移を呈し再手術を要した胃癌の1例. 八千代病院紀要 **4**: 37-40, 1984.
- 3) 塩崎哲三, 卜部元道, 前川勝次郎: 多数の胃癌壁内転移巣を有した噴門部癌の1例. *Prog. Dig. Endosc.* **30**: 279-283, 1987.
- 4) 百瀬英可, 生越喬二, 津久井優: 壁内転移をきたした sm 胃癌の1例. 日本消化器病学会雑誌 **18**: 71, 1987.
- 5) 井上信吾, 関川敬義, 松木 啓, 野口明宏, 在原文夫, 前田宜包, 菅原克彦, 小山敏夫: 胃壁内転移が巨大な粘膜下腫瘍様所見を呈した粘膜下進展胃癌の1例. 日本消化器外科学会雑誌 **22**: 2437-2440, 1989.
- 6) 円谷 彰, 野口芳一, 牧野達郎: 残胃の壁内に胃癌の転移再発をみた1症例. 外科 **54**: 527-530, 1992.
- 7) 吉本勝博, 高村博之, 野手雅幸: 胃癌壁内転移を伴う AFP 産生 sm 胃癌の1例. 北陸外科学会雑誌 **18**: 71-72, 1999.
- 8) 浅田康行, 宗元義則, 藤沢克憲, 笠原善郎, 三井 毅, 飯田善郎, 三浦将司, 藤沢正清, 登谷大修, 田中延善: 壁内転移によって多発性粘膜下腫瘍の形態を示した胃癌の1例. *Gastroenterol. Endosc.* **42**: 266-270, 2000.
- 9) 浅井昌樹, 稲村俊明, 西澤雅彦, 原 歩, 伊藤 貴: 胃壁内に広範囲かつ多発性の転移を認めた早期胃癌の1例. 日本内科学会関東地方会抄録 **481**: 31, 2000.
- 10) 村上 望, 北川 晋, 足立 巖, 森田克哉, 飯野賢治, 山田哲司: 活動性胃潰瘍の像を呈する壁内転移を認めた胃癌の1例. 外科 **65**: 1725-1728, 2003.
- 11) 下山雅朗, 河内保之, 永橋昌幸, 西村 淳, 新国恵也, 清水武昭: 残胃に壁内転移をきたした胃癌の1例. 日本臨床外科医学会雑誌 **65**: 385-389, 2004.
- 12) 吉川貴己, 安藤耕平, 正津晶子, 石和直樹, 森永聡一郎, 野口芳一, 山本裕司, 円谷 彰, 小林理: 筋層を主座とする壁内転移を来たした胃内分細胞癌の1例 日本消化器外科学会雑誌 **38**: 141-146, 2005.
- 13) 勝部亮一, 飽浦良和, 松本剛昌, 村嶋信尚, 五味慎也: 胃壁内に多発転移を認め rhabdoid feature を示した胃癌の1例. 日本消化器外科学会雑誌 **41**: 57-63, 2008.
- 14) 和田義人, 鍋山健太郎, 齊藤信明, 宮崎 亮: 胃癌壁内転移による幽門狭窄症の1例. 日本臨床外科医学会雑誌 **69**: 805-809, 2008.

## A case report of early gastric cancer with intramural metastasis

Yuki SOTA, Hironori TSUJIMOTO, Hideyuki SHIMAZAKI\*,  
Kuniaki NAKANISHI\*, Syuichi HIRAKI, Hiroyuki Horiguchi,  
Shinsuke NOMURA, Kazuo HASE, Junji YAMAMOTO and Hideki UENO

*J. Natl. Def. Med. Coll.* (2017) **42** (2) : 74–79

**Abstract:** Intramural metastasis (IM) in gastric cancer, especially early cases is rare and most of reported cases with IM are in advanced cases. Herein, we reported a case of early gastric cancer with IM. A 58-year-old man presented with epigastralgia. Endoscopic examination revealed a type 2 gastric cancer located at the posterior wall of the antrum. He underwent laparoscopic distal gastrectomy with D2 lymph node dissection. Pathological examination demonstrated moderately differentiated adenocarcinoma proliferating in the submucosal layer with metastatic lymph node. In addition, submucosal tumor was detected at 25 mm distant from primary lesion. Because of a gross appearance of a submucosal tumor without intraepithelial cancer extension, the same histological type as the primary tumor, and lacking any evidence of intravascular growth, this tumor was diagnosed as an IM associated with early gastric cancer. The clinical significance of IM in the early gastric cancer is unclear, and further investigation of a larger number of patients is necessary to establish an ideal follow up in such cases.

**Key words:** Intramural metastasis / gastric cancer / laparoscopic gastrectomy